

教育実習の効果と課題に関する探究 —家庭科教育実習生が身に付けたい資質能力—

田中 由美子

九州女子大学家政学部人間生活学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

要 旨

教員志望大学生が実践的指導力を身に付けるのは、その事前事後の指導も含めた「教育実習」であろう。そこで本研究は、学生の意識調査及び感想を基に教育実習の効果と実習生の課題を把握し、家庭科教育実習生が身に付けたい資質能力という視点で分析を行い、今後の授業内容に示唆を得ることを目的とした。

その結果、教育実習後、多くの学生が授業実践に必要な準備である「学習指導案作成」「教材作成」「知識理解」については自信をつけていた。しかし、「わかり易い説明」「問題行動への注意」「理解不足生徒への支援」「状況に応じた授業展開」「適切な声掛け」などは難しいようであった。また実習後の感想に、「授業の進め方、興味を惹く教材、思考を促す発問、考えを広げるグループ活動、授業規律が重要である」との記述が見られた。

この結果を今後の大学の授業に活かし、教員志望の学生たちが少しでも多くの力と希望を携えて教員生活のスタートをきれるよう支援していきたい。

キーワード 教育実習、教育実習生、家庭科、資質能力

I 緒言

近年、以前にも増して教員志望学生への実践的指導力が求められている。大学生が実践的指導力を身に付ける上で最も影響が大きいのは、その事前事後の指導も含めた「教育実習」であろう。平成18年7月に発表された中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」¹⁾においても、「教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適正や進路を考える貴重な機会であり、今後とも大きな役割が期待される。」との記述が見られる。

筆者は今年本学に着任した。今後、本学科において家庭科教員を養成するに当たり、教育実習を最大限活かし、学生たちにとって有意義な実習とするためには、その前後に必要な指導・教育を明らかにすることが重要であると考えた。

そこで本研究は、教育実習の効果と実習生の課題を学生の意識調査及び感想から探り、その結果を家庭科教育実習生が身に付けたい資質能力分類によって分析し、今後の授業内容へ

の示唆を得ることを目的とする。

II 研究方法

1. 調査対象者：K女子大学 中学校・高等学校家庭科教員免許状取得希望者25名
2. 調査時期：2016年5月～6月
3. 教育実習前指導

本学科では、教育実習は4年生の5月～6月に実施される。そのため5月初旬までに「事前指導」として8回の授業を行う。そのうち学科単位での授業が組まれている4回を筆者が担当した。

小澤ら(2005)²⁾の研究に、「教育実習生受け入れ家庭科教員が“教育実習前に学んできてほしい事項”(複数回答)」との調査結果が示されており、これも意識した事前指導を行うこととした。事項は多い順に「①礼儀・作法(言葉遣い等)(71.8%)」「②学習指導案の作成方法(69.4%)」「③家庭科教科書の理解(49.4%)」「④学習指導要領の理解(41.2%)」「⑤模擬授業の体験(29.4%)」「⑥発声や話し方(25.9%)」「⑦板書の仕方(24.7%)」が挙げられていた。これらのうち①礼儀・作法に関しては、心構えも含め具体的に指導・確認を行った。また、③～⑦については3年次までに家庭科教育法等の授業で学習し、模擬授業の実践も行われていた。②学習指導案の作成に関しては、実習先の指導教員により方針が異なるため、一般的な作成方法を全体に確認し、実習先での指導に沿って整えるよう伝えた。そして、授業担当箇所が決まっている学生については個別に指導を行った。

4. 調査の実施方法

4.1. 教育実習前後での「自信」の程度を問う質問調査(全24項目)

先行研究として、高木(2007)³⁾、青木(2013)⁴⁾により、「家庭科教師に求められる(必要な)資質能力(能力指標)」が検討されている。両氏の分類区分を基にして、筆者が「家庭科教育実習生が身に付けたい資質能力」として7分類(「学び取る力」「授業構想力」「教材開発力」「授業展開力」「表現技術力」「生徒対応力」「人間関係調整力)」を設定した。

また、林ら(2011)⁵⁾は、教育実習生として必要な資質能力であり、教育実習を通じて高める必要のある事柄の質問項目を作成している。これを基に本研究の調査項目を検討した。

上記7分類のうち、「学び取る力」を除く6分類に該当する質問項目を4項目ずつ、林らの項目を参考にしながら作成した。この24項目について教育実習前・実習後の2時点で、5件法(3=どちらともいえないを中央とし、5=自信がある～1=自信がない)の回答を求めた。

4.2. 教育実習中1週ごとに「できるようになった」程度を問う質問調査(全16項目)

4.1. は実習前後における「自信」の変容を探るものであったが、4.2. では実習中のどの時点で「できるようになった」かを把握するため、1週ごとに変容が見られるのではな

いかと思われる3分類（「学び取る力」「授業展開力」「生徒対応力」）について質問項目を設定し、教育実習中の1週終了ごとに記入するよう指示して配布し、実習後回収した。

「学び取る力」「生徒対応力」は4項目ずつ作成し、「授業展開力」については4.1.の4項目に対応した内容で各2項目の計8項目作成した。このように設定した理由は、これまでの経験で、授業展開力に課題意識を持ったまま教育実習を終えている学生が多いと感じており、比較的容易と思われるものと実践的で高度と思われるものの2段階で作成し、どの段階に課題が残るののかを探るためである。いずれの質問も、3=どちらともいえないを中央とし、5=できる～1=できない、の5件法で回答を求めた。

4.3. 教育実習中1週ごとの自由記述（できるようになったこと、まだできないこと、感想、気づき、抱負等） 4.2. 同様に、教育実習中の1週終了ごとに記入するよう指示して配布し、実習後回収した。

5. 調査方法：自記式調査

6. 分析方法：Excel2016による単純集計及び、エクセル統計（Bell Curve）を用い、対応のあるt検定を行った。

III 倫理的配慮

上記調査に当たっては、九州女子大学「社会科学系の教育研究及び事務的調査等に係る手続き」に基づき、学科会議の承認を得た。また対象学生には、研究の趣旨と研究参加の自由意思の尊重について説明し、個人が特定されないようプライバシー配慮及びデータ管理に十分留意することについても口頭で説明した上で承諾を得た。

IV 結果と考察

1. 教育実習前後の「自信」の変容から捉える効果・課題及び今後の授業内容の検討

自信の変容に関するアンケートの回収率は、未提出・記入不備を除き20名（有効回答率80.0%）であった。

表1に教育実習前後における「自信」の平均点の推移、実習後平均点の上・中・下位（◎・○・△表記）、実習前後比較のt検定、半数以上の肯定的回答（○表記）を示した。平均点の算出は、各質問項目の5件法の回答を得点化して求めた。また、実習後平均点の上・中・下位の分類は、得点順に並べ替えたものを3分の1ずつに区切って示した。図1には平均点をグラフ化した結果を示した。

資質能力の分類区分ごとの傾向を把握するため、表1の中に6分類それぞれの実習後平均点を示して比較した。平均点の高い順に並べると、1「人間関係調整力（4.3）」>2「生徒対応力（3.8）」>3「教材開発力（3.7）」>4「授業構想力（3.6）」>5「表現技術力（3.5）」>6「授業展開力（3.0）」であった。このうちの3～6については、青木（2013）の研究

表1 教育実習前後における「自信」の変容(1)

分資 疑履 区能 別力	質問項目	平均点		実習後 平均点: 上位◎ 中位○ 下位△	実習 前後 t検定	t値	半数以上 が肯定的 回答	
		前	後				前	後
I 授 業 前 期 力	1 授業の計画	3.1	3.9		**	4.29		○
	2 目標の明確な設定	3.2	3.8	○	*	2.56	○	○
	3 学習指導案の書き方	2.3	3.7	○	**	5.98		○
	4 授業内容の取捨選択判断	2.3	3.2	△	**	4.50		○
	平均	2.7	3.6					
II 教 材 前 期 力	5 興味関心惹く教材	2.7	4.0	○	**	5.00		○
	6 ワークシートの作成	3.1	3.9	○	**	4.29		○
	7 学習内容の知識・理解	2.6	3.7	○	**	5.39		○
	8 調理・被服実習の技能	2.7	3.4	○	**	3.39		○
	平均	2.8	3.7					
III 授 業 中 期 力	9 主体的に学習させる	2.8	3.4	△		1.83		○
	10 つまづき生徒への支援助言	2.6	3.1	△	*	2.24		
	11 授業での臨機応変な対応	2.3	2.9	△		1.83		
	12 生徒の意見の取り上げ方	2.3	2.8	△	*	2.13		
	平均	2.6	3.0					
IV 授 業 後 期 力	13 聞き取りやすい話し方	3.6	4.3	◎	*	2.40	○	○
	14 授業での発問	2.6	3.5	○	**	3.21		○
	15 板書の仕方	2.8	3.3	△		2.03		○
	16 わかり易い表現の説明	2.1	3.0	△	*	2.82		
	平均	2.8	3.5					
V 生 徒 対 応 力	17 生徒とのコミュニケーション・会話	3.2	4.2	◎	**	5.29		○
	18 節度を持った接し方	3.6	4.2	◎	*	2.40	○	○
	19 生徒の考え・人柄の把握	3.5	3.9	○		1.57	○	○
	20 生徒の問題行動への注意	2.1	2.8	△	**	3.94		
	平均	3.3	3.8					
VI 人 間 関 係 力	21 他の実習生への接し方	4.1	4.6	◎	**	2.94	○	○
	22 実習担当教員への接し方	3.7	4.3	◎	*	2.77	○	○
	23 反省・他者評価の活かし方	4.0	4.2	◎	*	2.52	○	○
	24 注意された時の前向きな対処	3.9	4.0	◎		0.90	○	○
	平均	4.0	4.3					

*: $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

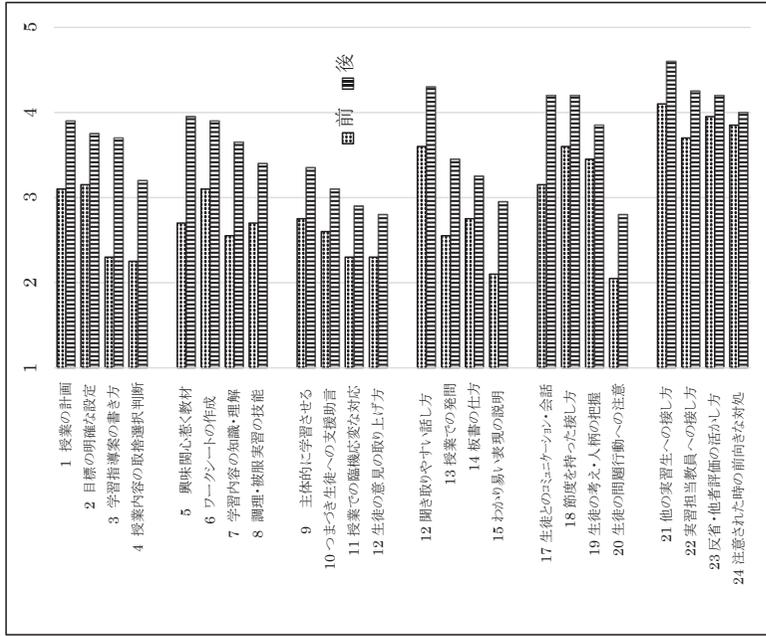


図1 教育実習前後における「自信」の変容(2)

による模擬授業を通じて獲得する能力の順位結果とすべて一致していた。

内容について詳細を検討していくと、「人間関係調整力」は実習前から高く、実習後も高得点であった。「授業展開力」は、青木の結果及び筆者自身の経験と同傾向にあり、最も低い。また、「授業構想力」「表現技術力」「生徒対応力」は比較的達成が容易と思われる項目は高く、実践的で高度な力を求められる項目は低い傾向が見られ、同分類の力であっても「実践的指導力」を身に付けることの難しさがうかがえる。6分類それぞれの結果から、効果と課題及び今後の授業内容を考察していく。

1.1. 「授業構想力」

「3 学習指導案の書き方」「4 授業内容の取捨選択判断」とともに実習前の自信は低かったが、実習前後において対応のある t 検定を行った結果 1%水準での有意差が見られた。学習指導案は書き慣れることで自信がつくものと思われる。2・3年次から、各学生の教育実習予定校の自治体に対応した指導案を示し、作成する回数を増やす。

また、「4 授業内容の取捨選択判断」については、数社の教科書比較をさせ、重要なポイント、わかり易い表現などを理解させた後、試験問題作成を取り入れること等で判断力を培う。

1.2. 「教材開発力」

4項目とも実習前後の t 検定の結果 1%水準での有意差が見られ、実習後には半数が「自信がある」「ほぼ自信がある」との肯定的回答をした。特に「5 興味関心を惹く教材」「7 学習内容の知識・理解」は平均点の上昇が大きい。人に教えるという行為は、自身が学習することの何倍も知識・理解が必要となり、さらに、生徒たちの興味関心を惹く内容へと工夫する過程において知識・理解の深化とともに教材づくりに対する自信につながるのではないかと推察される。これに対し、平均点の上昇があまり見られない「8 調理・被服実習の技能」については実習担当教員と連携を図り2・3年次からの学習を強化することで技能を高めていく。また、知識・理解についても、教育実習以前からの向上を目指し強化していく。

1.3. 「授業展開力」

4項目とも、他の分類に比べ実習後の自信の向上が低水準である。「9 主体的に学習させる」に関しては、教員（実習生）自身がその手法で学んだ経験が乏しいと授業実践が困難である。それを解消するため、筆者担当の1・2年次の授業において、グループでの話し合い・まとめ・発表、各自のテーマ設定・調査・レジュメ作成・発表・相互評価、ロールプレイング用シナリオ作り・全員参加のロールプレイング等、アクティブラーニングを取り入れた学習を進めている。これらを通じ主体的学習力が培われ、授業実践の手法のヒントにもなると考える。

「11 授業での臨機応変な対応」「12 生徒の意見の取り上げ方」に関しては、実習前の模擬授業を指導計画通りに模範的に行うだけでなく、生徒役の学生に中学・高校生になりき

って自由な発言・反応をさせ、本番さながらの模擬授業を行う機会も設け、それに対応できる実践力を培う。

1.4. 「表現技術力」

「13 聞き取りやすい話し方」には自信がうかがえるものの、「16 わかり易い表現の説明」は実習後においても半数が肯定的回答をしていない。適切な言葉を用い、過不足のない説明をすることの難しさと、短期間での育成の困難を表している。授業のみでなく生活の中でも語彙力・表現力を身に付けられるよう、新聞・書籍・論文講読、小論文指導を行う。また、教科指導、場面指導（生徒指導）のマイクロティーチングの機会を多く設け、生徒の理解・納得を促す表現・言葉掛けを考え、実践させる。

1.5. 「生徒対応力」

「17 生徒とのコミュニケーション・会話」は、実習前後の t 検定の結果 1%水準での有意差が見られ、実習後には半数が「自信がある」「ほぼ自信がある」との肯定的回答をした。おおむね順調であると思われる。しかし、「20 生徒の問題行動への注意」は実習後においても半数が肯定的回答をしていない。教育実習生の立場では、あまり踏み込めないことも考えられるが、卒業後、教壇に立った直後から毅然とした指導が要求される。前述の通り、場面指導を多く取り入れ適切な言葉・態度での指導ができる力を育成する。

1.6. 「人間関係調整力」

4項目とも実習前の時点で半数が肯定的回答をしていた。この回答は、学生自身の自己評価ではあるが、筆者が査定授業のため訪問し実習生の様子を伺った複数の先生方からも高評価をいただいております、おおむね良好と思われる。実習前の指導のみならず、普段から礼儀作法、言葉遣いを含めた接し方や、注意・助言をいただいた際の受け止め方・対処等を心得させる。

2. 教育実習中「できるようになった」ことの変容から捉える効果・課題及び今後の授業内容の検討

アンケート回収率は、未提出・記入不備を除き17名（有効回答率68.0%）であった。表2に教育実習中「できるようになったこと」の平均点推移、3週目終了時平均点の上・中・下位（◎・○・△表記）、1・2週間目間及び2・3週間目間の t 検定、半数以上の肯定的回答（○表記）を示した。平均点の算出は、各質問項目の5件法の回答を得点化して求めた。また、上・中・下位の分類は、得点順に並べ替えたものを3分の1ずつに区切って示した。図2には平均点をグラフ化した結果を示した。

3分類の全体的傾向を把握するため、それぞれの実習後平均点を求めて表2の中に示した。比較すると、「学び取る力」が高いが、分類間の大差は見受けられない。しかし、「授業展開力」の分類内において、4.1. の「自信がある」調査と同様に、比較的達成が容易な項目は高く、実践的な力を求められる項目は低いという段階的差異が見られた。

表2 教育実習中「できるようになったこと」の変容(1)

分類 質 区 分 力	質問項目	平均点			3週目 平均 点:		1週と 比較 t検定		半数以上 が肯定的 回答		
		1 週 目	2 週 目	3 週 目	上位◎ 中位△ 下位○	1.2 週 目 間	2.3 週 目 間	1 週 目	2 週 目	3 週 目	
学 び 取 る 力	1 他の実習生の良い点の取り入れ	4.3	4.4	4.5	◎						
	2 担任教員の生徒の採し方・声掛け	3.7	4.2	4.5	◎	*	*				
	3 教員への支援・助言の求め方	3.8	4.1	4.4	◎	*	*				
	4 教員の発問・受答え・板書法の学び	4.1	4.4	4.3	○						
	平均	4.4									

授 業 展 開 力	5 生徒が意欲的に取り組む授業	2.3	4.0	4.4	◎	**	**				
	6 主体性を高める授業	1.8	3.3	3.9	△	**	**				
	7 理解不十分な生徒の見極め	2.6	3.8	4.1	○	**	**				
	8 理解不十分な生徒を見極め・支援	2.1	3.4	3.8	△	**	**				
	9 多様な反応を想定した授業づくり	2.7	3.5	4.2	○	**	**				
	10 学習状況に応じた授業展開	1.8	3.3	3.8	△	**	**				
	11 生徒意見の取り上げ、授業への反映	2.2	3.5	4.3	○	**	*				
	12 場面に応じた声掛け	2.4	3.5	3.8	△	**	**				
		平均	4.0								

生 徒 対 応 力	13 生徒の名前の記憶	2.6	3.8	4.4	◎	**	**			
	14 教員を見習い、生徒へ指導	2.9	3.5	4.2	○	**	**			
	15 生徒とのかわわり	2.9	3.8	4.2	○	**	**			
	16 生徒一人一人の良さを発見	2.8	3.3	4.1	○	**	**			
	平均	4.2				**<0.05	**<0.01			

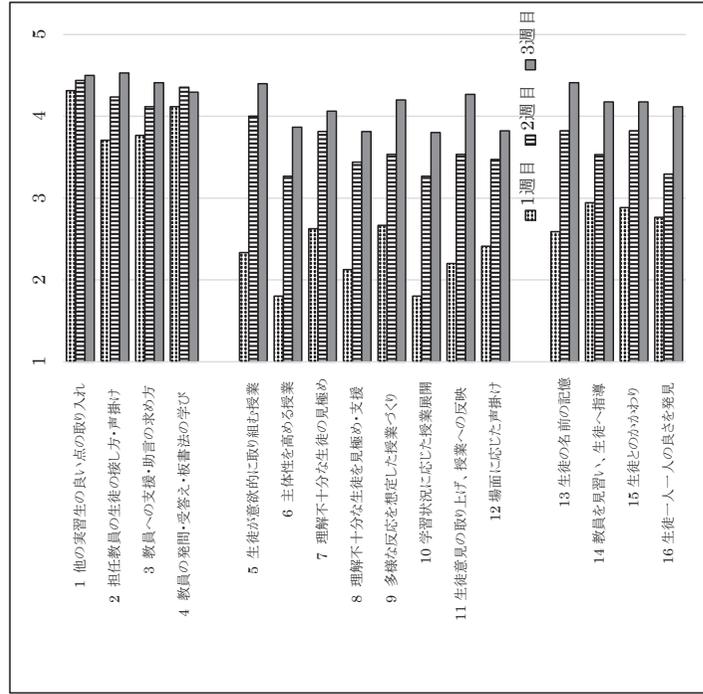


図2 教育実習中「できるようになったこと」の変容(2)

2. 1. 「学び取る力」

4項目とも、1週目終了時点で半数以上が「できる」「ほぼできる」との肯定的回答をした。積極的に学び取った様子が見える。

2. 2. 「授業展開力」

8項目すべてにおいて、1・2週目、もしくは2・3週目終了時の間でのt検定において1%水準での有意差が見られた。2週目終了時点で半数以上が肯定的回答をしたのは「5 生徒が意欲的に取り組む授業」「7 理解不十分な生徒の見極め」「12 場面に応じた声掛け」の3項目であった。しかし「12 声掛け」に関しては3週目終了時においても平均点が低いことから、苦手な学生が存在し、個人差が大きいのではないかと推察される。口数の寡多は一朝一夕に変容するものではないが、採用試験前の面接練習において、回を重ねるごとに受け答えが飛躍的に上達する学生がいることから、適切な声掛けができるよう具体的なアドバイスをしつつ、数多く経験させることが重要と考える。

3週目終了時になって半数以上が肯定的回答をしたのは「6 主体性を高める授業」「8 理解不十分な生徒を見極め・支援」「9 多様な反応を想定した授業づくり」「11 生徒意見の取り上げ、授業への反映」の4項目であった。

この結果を見ると、授業展開力に関しては、2週目終了時まで「できる」と自己評価されなかったことが、最後の1週間で評価できるようになるものが多いのではないかと推察される。教育実習期間の長さは受け入れ先の負担等の意見があるが、教育実習を3週間実施することの意義とも捉えられる。

次に、内容はほぼ同じであるが段階の異なる項目を比較すると「7 理解不十分な生徒の見極め」はできても「8 見極め後、支援」することは難しい様子が見える。支援するには、理解不足に陥っている根本的な原因を察し、それを効果的に解消する方法を見つけ、わかりやすく説明しなければならない。さらに、中学・高校生が理解不足を指摘されることに嫌悪感や羞恥心を与えないよう配慮した言葉掛けも必要である。これらは細やかに具体的に指導していく。

また、「9 多様な反応を想定した授業づくり」を準備していても、「10 学習状況に応じた授業展開」は困難であることが表れている。想定を超えた意見やクラスによる反応の差には、まだ対応しきれていない様子が、自由記述からもうかがえる。前述の通り、マイクロティーチング、模擬授業の機会を多く設け、授業進行のみに終始することなく多少余裕をもった臨機応変な対応や、全体を見渡しながらの授業を行えるよう準備させ、実習に臨めるよう留意する。

さらに、模擬授業等の相互評価シートに詳細な評価観点を示し、自己評価とすり合わせることにより具体的な改善点に気づかせる。

2.3. 「生徒対応力」

4項目すべてにおいて1・2週目終了時の間でのt検定において1%水準の有意差が見られた。おおむね順調であったと推察される。来年度以降の学生においても、柔軟に生徒対応できるよう留意する。

3. 教育実習中1週ごとの感想（自由記述）

アンケート回収率は、未提出・記入不備を除き17名（有効回答率68.0%）であった。表3に、教育実習中1週ごとの感想（自由記述）を示した。

「授業」に関しては、1週目は指導教員の授業参観を行う学生が多数であった。その中で、同じ授業内容を同じ教員が行うにもかかわらず、クラスによって反応に大差があることへの驚きが述べられていた。これは3週目まで見受けられ、学生自身が担当するようになることさらに実感し、それに対応することが必要であり、その力を付けたいと切実に感じている様子がかがえた。

1週目終了時点においては、上記以外では「発問」「問題行動への注意」「声掛け」「雰囲気に応じた対応」「想定外の回答への対応」「うまく説明すること」などの難しさを述べるとともに、抱負も数多く述べられていた。

「生徒対応」に関しては、「生徒の名前を覚えきれない / クラス生徒の名前は覚えた」「関わり方がわからない / 自分から積極的に声掛けをした」と正反対の記述が見られ、個人差があることが推察される。

2週目終了時点では、引き続き「発問」「臨機応変な対応」「生徒の意見の取り上げ」ができないという記述も見られるが、自身が授業を始め、「授業の進め方」「興味を惹く授業・教材」「HRで伝達以外のことを話す」ことの難しさを述べるとともに「指導案作成に慣れてきた」「実習補助として助言できた」「授業感想欄のプラス意見が嬉しい」等の感想が見られ、生徒対応についてのマイナス記述が見られなくなった。

3週目終了時点では、「学びを生活で活かす意欲高め、主体的学びになるよう工夫したい」「授業の『進め方』『（興味を惹く）教材』『わかりやすい説明』『思考を促す発問』『考えを広げるグループ活動』『授業規律』の工夫が重要（ほぼ同内容2名）」「『手立て』（授業目標達成のため何をどうやってどのように教えるか）を考える大切さを知った」「授業回数を重ねるほど良い授業ができたが、初めてのクラスはいつもうまくできない。教師は何度か出来るが生徒は一回のみ。毎回の授業を大切にしたい」等、本質的・総合的気づきも多く見られ、学生にとって実り多くかけがえのない経験であったことをうかがい知ることができた。

V まとめ

本学科において家庭科教員を養成するに当たり、教育実習を最大限活かし学生たちに有意義なものとし、卒業後スムーズに教員生活に移行できる力を身に付けさせるにはどのような

取り組みが必要かを検討した。教育実習前後及び実習中の学生の意識調査等を行い、家庭科教育実習生が身に付けたい資質能力分類にあてはめて分析した結果、身に付きやすい順に、1 人間関係調整力> 2 生徒対応力> 3 教材開発力> 4 授業構想力> 5 表現技術力> 6 授業展開力であった。短期間で身に付けることが困難と思われる「表現技術力」「授業展開力」については、2・3年次から時間をかけ、適切なアドバイスをしながら、繰り返し取り組ませることで力を培いたい。それらも含め、今後の授業への導入内容を具体的に検討した結果を次に示す。

「I 授業構想力」

- 「学習指導案」：教育実習予定校の自治体対応の指導案を示し、2・3年次から複数回作成
- 「授業内容の取捨選択の判断」：複数出版社の教科書比較、試験問題作成

「II 教材開発力」

- 「調理・被服実習の技能」：実習担当教員と連携し、2・3年次から技能強化

「III 授業展開力」

- 「主体的学習」：1・2年次の基礎授業からアクティブラーニングを取り入れた学習
- 「授業での臨機応変な対応」「生徒意見の取り上げ」「生徒の問題行動への注意」「場面に応じた声掛け」：模擬授業（生徒役の学生に発言・反応をさせて実施、詳細な相互評価シート作成・自己評価とのすり合わせ）、マイクロティーチング（教科・場面（生徒）指導）
- 「理解不十分な生徒の見極め・支援」：問題の本質の洞察、効果的解決策の提案、配慮等の指導

「IV 表現技術力」

- 「わかり易い表現の説明」：新聞・書籍・論文講読、小論文指導、模擬授業等

「V 生徒対応力」

- マイクロティーチング（教科・場面（生徒）指導）等を通じ、適切な言葉、態度での指導ができる力の育成

「VI 人間関係調整力」

- 日常生活も含めた礼儀作法、言葉遣い、及び注意・助言の受け止め方・対処の心得

「自由記述より」

- 「発問」「授業の進め方」「興味を惹く授業・教材」「HRで伝達以外の話」「思考を促す発問」「考えを広げるグループ活動」「授業規律」等への工夫：筆者の中学・高校現場での経験談等。

本研究の目的であった、教育実習の効果と課題を学生の意識調査等から探り、具体的対応策をまとめ、授業内容への示唆を得ることができた。

今後はこの結果を活かした授業実践を行い、学生の変容や学習効果の測定を比較研究し、よりよいものにしていく。

教員志望の学生たちが、教育実習を充実したものとするため、その前後の学びを仲間とともに楽しみながら切磋琢磨できるよう、また、それらによって、少しでも多くの力と希望を携えて教員生活のスタートをきれよう、支援していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省、「今後の教員養成・免許制度の在り方について（中央教育審議会答申）」、(2006)
- 2) 小澤滋子・尾崎沙和子・櫻井純子、「家庭科教育における教育実習生に望まれる資質能力」、『女子栄養大学紀要』vol.36 (2005) (女子栄養大学) 95-102
- 3) 高木幸子、「家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討（第1報）—模擬授業実践による学生の課題認識の分析—」、『日本家庭科教育学会誌』49 (4) (2007) (日本家庭科教育学会) 256-257
- 4) 青木幸子、「模擬授業による教育実践力の育成の可能性」、『東京家政大学博物館紀要』（第18集）(2013) (東京家政大学) 27-37
- 5) 林武広他、「教育実習指導の効果に関する研究（I）—附属市東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討—」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』（第39号）(2011) (広島大学) 81-86

Investigation of the effects and the problems of teacher training —Necessary Qualities and Abilities for Student Teachers of Home Economics—

Yumiko TANAKA

Faculty of Home Economics Department of Human Life Studies

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

After undergoing teacher training, many students are confident about necessary preparations for teaching practice “teaching-plan creation,” “teaching-material making,” “knowledge.” However, aspects such as “providing clear explanations,” “guide to problem behavior,” “lack of understanding or support toward a student,” “Class deployment depending on the situation,” and “appropriate voice account,” seem difficult. This study showed that information on “how to proceed with a lesson,” “preparing interesting or catchy teaching material,” “asking questions on suggested thoughts in a lesson,” “group activities to expand ideas,” and “class rules” played an important role in the impressions of teacher training. By taking these results into account in the future and taking advantage of the lessons at the university to foster missing training aspects, I want to become a confident teacher.

Keywords : Teacher Training, Student Teachers, Home Economics, Qualities and Abilities